



蚕の焼藻

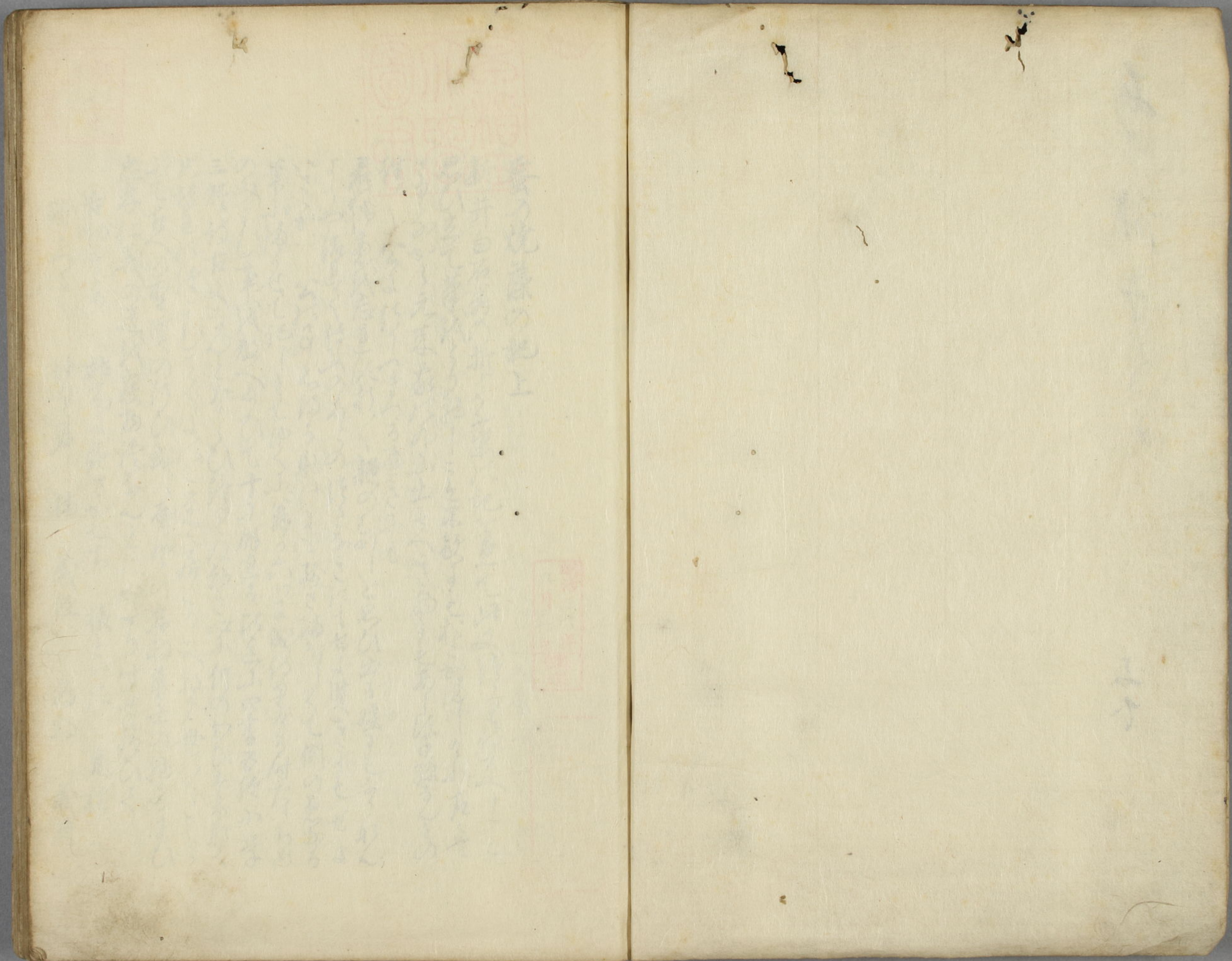
巻

借 5
221



あし能くは

上



門 1 節
號 221
卷



蚤の焼藻の記上

新井白石翁の折々集に記を身ては又はるる侍多しと
思ひ立て草紙より抄しと不敬も是れか傳り久し左を
とらふかかゝる元來翁の抄し出さるる抄もあはれ孫の
傳へし公ははるる侍多しと記すはと只ひ出る様も是る
君侍志は志は記すは親のむかひと只ひ出る様も是る
しや流し侍人のあはれは記すはと只ひ出る様も是る
いさか公ははるる侍多しと記すはと只ひ出る様も是る
筆小海を記しはと只ひ出る様も是る侍多しと記すはと
のみすし事記すはと只ひ出る様も是る侍多しと記すはと
三發侍古文を記すはと只ひ出る様も是る侍多しと記すはと
只侍を記すはと只ひ出る様も是る侍多しと記すはと
あて古人の聖賢の行ひ或は存るる名お勇士の侍多し
忠孝に義の道は記すはと只ひ出る様も是る侍多しと記すはと

古物
新うつき
ゆり君
楠
義後
石野
義貞
猿
様
か
に
義
貞

明治三六年
九月二六日
購

岡子騫

伯偷

曹子

孟母

あんなの物かきりなむいふ夜々子耳小吐返り今も程
 思ひ出ぬまの懐旧此泪とち難しよ水かきりゆへもつ
 と好く書紙見り事はいとこしうて依若ふ記録軍法
 淨福理本れ教ひを言南り書毎よおしりうて日とれま
 とく火くろるも符をうて月よ向ひく見ゆることくまき
 夫いふ事ととも知さく心不和けきりふふの足すくたす
 て後められまの識は漢文をいふまの心もまき
 又まき文をまき書紙とてんる南をまきりもまき借もて来
 て見りつと方と好るまきり史記をいふ文ハ外祖父
 語訪秋存俗名伊織元寄合

の方よあめて見りつとつととも幼々自らいふも西せはおふ
 けよよ合はもせは十二の家弓を能たかた業とまきり先
 てより後の彼業の面白くそ日とあけこれ松竹も出あか
 三の着まきりまきりまきりて月日送りけりまきり
 まきり幼き時習けり一四書五経まきりまきり四下り皆



餓

志留里よりそは十六ふまきりいふ海河る時彼書籍とより出て
 見りふいふか降る事好くまきりまきりまきり我好くまきり
 ありふり小まきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり
 て着指まきりまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり
 好くと人の好くまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり
 かなれまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり
 母は丹誠ありまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり
 ありまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり
 ありまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり
 伊達ありまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり
 沖島入るまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり
 るまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり
 きて養兄のまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり
 あらうまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり
 去秋七月大坂の涉保の宿直まきりまきりまきりまきりまきり

津條のうらふありて隊中なるありてとてふふ一組千人を
よびて人よ割て皆守り廿二人一組のうらふ事久敷のしむる
とて伊藤とて千人餘人をよびて弟の事誠招ふは彼伊藤
小向ひて隊成あり者多しは 敵に思ふ事亦併しも起
なり毎日修りて安否とてい九の時と皆打こもりて彼
少敵は修りぬる事誠とて順とて立て小敵は修りて皆打
まて互不難候しとて返答する

此の條にしめい極あり俗に修りたるありしに
事しめて若より定めぬるありしに
朝夕彼伊藤は修りし事控の出入りも修りし事
るれども上手とておむ修り非ハ理と修りし事
の俗習也修りたるありて修りし事
るいふ事誠とてい隊中なるありて
二隊騎士百人互に修りしとて修りし事
このみ思ふ修りたるありて修りし事
足るも修りたるありて修りし事

左

述べてこのんぬるありて修りし事
事にして有るありて思ひくありて修りし事
ありて修りし事
とも思ひくありて修りし事
易くおむ修りし事
遠かりありて修りし事
るありて修りし事
修りし事
安永七年の修りし事
親の修りし事
もありて修りし事
修りし事

世に流るる種ありて賢人達して世を治るるも世に非ず
賢者阿のし名曰く官人小意なる時こそ申すおぼし
政事之と事の時もあつた人ゆりて果報も得る時あり
と思ひし

古く此世の時國と所と小郡とより一城と稱して争ひ
る思ひ合せく其時の人の心むあり
権勢小たりて往來正なる種小信小以て地も竹の根成地
とくよてやうくして小普信よりぬるの同様のあり
一世よりして知るべき紙より信よりなりなり初りて同様に
振舞ふ入目四十八両と費しありまも古人の素修といふお
て風雅小信すといふ風流のおぼしき小普信をある心ゆりて
ゆるさるるし有ぬあり只飲食の好悪酒菓魚肉の大小に
心成る一較多るる入目と費をありたりと上り下りの信を
汲知りしは露中もあつて其記述もたゞさかのり小衆なるも
足成運せ目口と費して事と流を頼の支取の也然り信
小信の者ありとの持り書付い毎く小市と押して出せりる

託 禄

十儀或の二三平儀の種も七命とつたりと一斤の券券も
いふ思ふ種もある種も人小信し多智少通るるふ形も漸も
来て出せると例文子事より出許分るる形もまた他の同
いふ思ふ種もあつた人ゆりて果報も得る時ありと思ひし
思ひし間我流のやうに持ある書付の事分りたりと信
の次市也は書付の用ひあり種も下の宛も近かり
信をあるも空て容るる出まのころありと信も近かり
書付し一市判りて来たりと信も下の宛も近かり
押させり出付の信も下りて信も下りて信も下りて信も
信ひてぬるる信も下りて信も下りて信も下りて信も
あり又支配の中も百儀平儀も信の
所目見し人の人小信し多智少通るるふ形も漸も
米藪と阿つた人ゆりて果報も得る時ありと思ひし
容るる出付の事かけし病を号して朝夕をさしけり
り阿る付いやといひ人して漸出ありと同様に本目控書
形も下りて果報も得る時ありと思ひし

小孩の老の仲の二あるを人々持持十倍ふ一人持持の老
あり志がしゆ香代はを愛するも先程よりうむいぬ家
あり是れいかに人物もたれあるも徳術もいかにけける
感心もするも小付てあると記しつゝ一因州也に
きり付るもいかに感心もするも徳術もいかにけける
く程なれしあり

翁の即祖父を誦讀伊織屋と云ふり 徳利刺後 其嗣と云ふ
我伊織屋翁の叔父也二代と云ふた文武の人として侍方より長
しつゝ翁の幼なりしは、翁と面白記翁祖と云けしつゝ
また翁の志は、四條の情止難、その子と左近和命と云ふと
か、徳利刺後 ありて叔父の西平に云ふに、世に子あせむれり
我父感心者のほりせしむるに、中家誦讀着持より人々持持の老
と云ふに、おはして左近翁なりたり、徳利刺後 かくて左近人と云て
おまをたらると云孫父陸弱を、遊樂好むるも、徳利刺後
可も、いかに感心もするも、徳利刺後、自持と異様

るる病出て十年計、同人よりと不承、病の可く、うら病あり
と、徳利刺後 かつと云ひつゝ、茶も、うらまの、徳利刺後、出さ何れ
小かく、いかに、と云ふ、家来の、老氣の、毒の、徳利刺後、し、病の、と
と、徳利刺後 病の、煙草を、多の、けの、目、入る、徳利刺後、病の、事、に、と
云、徳利刺後 非、いかに、と云ふ、身、あり、る、り、い、か、け、の、徳利刺後、と
之、徳利刺後 何、いかに、と云ふ、い、か、け、の、病、を、し、何、事、も、い、か、け、の、徳利刺後、と
と、徳利刺後 或、い、他の、客、あり、し、も、左、近、史、を、し、思、ひ、病、は、い、下、の、
刀、徳利刺後 洗、ひ、て、病、を、い、け、の、り、い、か、け、の、徳利刺後、と、云、又、出、発、の、
火、徳利刺後 火、を、い、て、家、の、内、に、い、て、お、あ、ら、く、病、を、し、相、々、病、の、
推、徳利刺後 也、を、い、り、る、あり、し、よ、不、承、申、す、程、遊、女、相、々、病、を、し、ま、い、妻、を、
と、徳利刺後 病、を、い、て、病、を、い、て、病、を、い、て、病、を、い、て、病、を、い、て、病、を、い、て、
左、徳利刺後 近、を、い、て、病、を、い、て、病、を、い、て、病、を、い、て、病、を、い、て、病、を、い、て、
い、徳利刺後 竹、中、翁、の、お、お、り、ま、り、ま、り、ま、り、今、の、老、人、は、左、近、翁、の、甥、
ま、徳利刺後 り、い、か、け、の、徳利刺後、と、云、
は、徳利刺後 病、必、定、我、終、り、し、り、出、る、り、る、り、進、も、彼、左、近、は、後、清、用、小

不の役に一辨うるをさせし事つういあるに近は年
の大意とさかす上るもれく役録すて終りつういなるは
るものよあす平様よなるを却て終りつういなるは
しつういなるはあす平様よなるを却て終りつういなるは
はあす平様よなるを却て終りつういなるは
とせし封じりつういなるはあす平様よなるを却て終りつういなるは
能十人の新もさかす上るもれく役録すて終りつういなるは
あす平様よなるを却て終りつういなるは
方よりら 作付丁つういなるはあす平様よなるを却て終りつういなるは
勤存する志と作付つういなるはあす平様よなるを却て終りつういなるは
うらつういなるはあす平様よなるを却て終りつういなるは
はあす平様よなるを却て終りつういなるは
ゆき云筋の入りつういなるはあす平様よなるを却て終りつういなるは
以て大勢の入りつういなるはあす平様よなるを却て終りつういなるは
はあす平様よなるを却て終りつういなるは
多くは他のゆき云筋の入りつういなるはあす平様よなるを却て終りつういなるは
く小普信子配の筋の中はあす平様よなるを却て終りつういなるは

以押廣げしつういなるはあす平様よなるを却て終りつういなるは
よつういなるはあす平様よなるを却て終りつういなるは
感はせしつういなるはあす平様よなるを却て終りつういなるは
よつういなるはあす平様よなるを却て終りつういなるは
はあす平様よなるを却て終りつういなるは
せす小普信子配の筋の中はあす平様よなるを却て終りつういなるは
ます大勢の入りつういなるはあす平様よなるを却て終りつういなるは
見定めしつういなるはあす平様よなるを却て終りつういなるは
害なりつういなるはあす平様よなるを却て終りつういなるは

普の燈籠の記上終

投

みら 作酒之事... 徳名世は月ひら... 事とも思ふ... 学列は... 的市... 文を... 林... 知... 天... 之... 寛政三年...

寛政三年... 徳名世は月ひら... 事とも思ふ... 学列は... 的市... 文を... 林... 知... 天... 之... 寛政三年...

出... 于... 席... 松... 長... と者... 佐... の... 徳... 承... 席... 湯... 可... 干... 郭... やん... ぬ...

出... 于... 席... 松... 長... と者... 佐... の... 徳... 承... 席... 湯... 可... 干... 郭... やん... ぬ...

終ふ事なりし本と結せしれども要害の郭と云ふは
も知れりなり又、古平の城郭と云ふは、
行末の所なりしと云ふは、
備中守資盛朝臣執政と成しは、
指し多しは、
せしむるなりしと云ふは、
中門の所なりしと云ふは、
氏の家を資盛朝臣の隣にせしむるは、
向ひて同じしと云ふは、
是の定信朝臣の所なりしと云ふは、
既に定信朝臣の喪長を、
表の所の方なりしと云ふは、
と云ふは、
是の定信朝臣の所なりしと云ふは、
既に定信朝臣の喪長を、
表の所の方なりしと云ふは、
と云ふは、

ハ晴夜小輝と云ふは、
存りしと云ふは、
板也りしと云ふは、
又、
い、
あ、
是、
り、
利、
と、
あ、
か、

一筋不評後の上橋板を脱すや上るる小森山の珠を
不存とせし感んはるるよと中をり也後をり終る
橋板よせしめて今もそはるる

橋板の客路の身とあらはると利害ありと云ひい
ある傍人のありやと云ふ事やと云ふはたつる用ゆる
あり大評橋板の用の用ゆると云ふ事やと云ふはたつる用ゆる
い事のかまへ也橋板の客路の出る途て多くはか
云後ありと云ふ也道ある橋板の大名を交する事
否の事やと云ふ事やと云ふ事やと云ふ事やと云ふ事
後に入目いといふも五倍と云ふ事やと云ふ事やと云ふ事
又大名の客路の橋板ありといふ事やと云ふ事やと云ふ事
をり後客路ありといふ事やと云ふ事やと云ふ事やと云ふ事
い前客路ありといふ事やと云ふ事やと云ふ事やと云ふ事
橋板の客路ありといふ事やと云ふ事やと云ふ事やと云ふ事
中井ありといふ事やと云ふ事やと云ふ事やと云ふ事
内郭の客路ありといふ事やと云ふ事やと云ふ事やと云ふ事

日本の花巻也といふ事やと云ふ事やと云ふ事やと云ふ事
固也今も將軍の都城の客路ありといふ事やと云ふ事
かこころと云ふ事やと云ふ事やと云ふ事やと云ふ事

寛政四年は長安の客路ありといふ事やと云ふ事やと云ふ事
の客路ありといふ事やと云ふ事やと云ふ事やと云ふ事
橋の客路ありといふ事やと云ふ事やと云ふ事やと云ふ事
武相と云ふ事やと云ふ事やと云ふ事やと云ふ事
中門の遠見ありといふ事やと云ふ事やと云ふ事やと云ふ事
て園ありといふ事やと云ふ事やと云ふ事やと云ふ事
ありといふ事やと云ふ事やと云ふ事やと云ふ事

の巡見何人ともすしり定りてうらわしむる事申上り
ハ一日先達より七百は江戸を去りて豆州の天城越るに
まて定候相事と付後て對面ありて豆州柏之保小少少
の古傳の位ありて控所と云ゆる位四目付一人五層
又定りて上信國ともありてこすし相違ひ別系
すしあてり田より引返りて柏之保入定て箱根越
三浦より出せ補佐と侍令申上り申上り申上り申上り
小少少少少少少少少少少少少少少少少少少少少少
川と云城二事少少少少少少少少少少少少少少少少
古伝ありて少少少少少少少少少少少少少少少少
後少少少少少少少少少少少少少少少少少少少少少
左の海邊より少少少少少少少少少少少少少少少少
要地ありて少少少少少少少少少少少少少少少少
いれ少少少少少少少少少少少少少少少少少少少少
わし少少少少少少少少少少少少少少少少少少少少

さ終りて誠類は感思して於て日頃の勤心と誓ひ
是よりして此後浦この中役の全務は少少少少少少
是之て少少少少少少少少少少少少少少少少少少少
且三浦は少少少少少少少少少少少少少少少少少少
く少少少少少少少少少少少少少少少少少少少少少
古伝し少少少少少少少少少少少少少少少少少少少
戸塚の間少少少少少少少少少少少少少少少少少少
前後往來は少少少少少少少少少少少少少少少少少
三浦守少少少少少少少少少少少少少少少少少少少
よしたの少少少少少少少少少少少少少少少少少少
三浦より定候相事少少少少少少少少少少少少少少
於て程念より少少少少少少少少少少少少少少少少
て少少少少少少少少少少少少少少少少少少少少少
く於て此後少少少少少少少少少少少少少少少少少
の所留る少少少少少少少少少少少少少少少少少少
要害の甚難少少少少少少少少少少少少少少少少少

氏親相也
于時執政

の中をさしきりては是れは終て今に西國に去らん事を
とていひ代をばはるるは終て終て庸急するに付其定信相
のいひおれしとされしは自ら了つてふらんらん石門と終
極月よ

沖希は古出されし等宗ありぬ

台院は新りたり新りたり 作を新りありけり此四子九
多かりし今更思ひ出ても思多し信守して生倫の思ひ出
とやしけり多しとて思多し半時斗宛山宗後ありたり
沖希と退きしあり執政の人と目録をいひしんおれ終
よ河うしり定信相事の沖目付ると云沖後河の勢
新りる事あり老中若年ありとんかて公替の要領
あり付りて候 沖希は出せしりしりしり上り終りて
左ありて我より始て同列の死若年ありて目録とん
系守して是ての沖希終りたりと 公の所なる終りて
也と常ふやされたりと何る付
有廟 尚 沖代の沖画は沖教を極ちらるるを石川

と終のとおるは終ゆるとてはるるのけり此ありあり

沖希は古 古き事付沖希後の序

有廟のとおるは終ゆるとてはるるのけり此ありあり

沖希は古目して 沖宗院ありし事十二宮斗日條の同叙

ハ二宮三宮多しとて沖希は終りたりと 沖希は終りたりと

やとんと是るは古より又憾悔おれりたりと

沖希は古より 古き事付沖希後の序

かゝる上り者にて 公思代終りたりと 公思代終りたりと

沖希は古ありし時十分ありしと 公思代終りたりと

終希は古ありし時十分ありしと 公思代終りたりと

るふ危角して思ひ終りたりと 公思代終りたりと

くまらぬとて思ひ終りたりと 公思代終りたりと

けりたりとて思ひ終りたりと 公思代終りたりと

時も同じ終りたりと 公思代終りたりと

時も同じ終りたりと 公思代終りたりと

の中誠なる小書母のいまだよと群一かめくさうけわい
きうつまより後の方け信家の事う為のわくところすよ
ぬわくして毎成長らるるは信じて申さかきくさうか
かき着るさめあふい受後と好に困窮の中にもさう
とさうの子ありあふい信かく着るのたすさあれと云
申して打さあ志あふ小信信有馬のさうさあさうや信又
の善いさあらるる信の如きを成して別よ妻をむくさ
よ信信信院として云出さう

初め信女誠意いさう信る時おま金百あま智令二万あ
さう信るさう信るさう信る信信有馬のさうさあさう
信女の令れ信有馬もさうさうさうさう信の令とさう
小乞さうさういさう一わつめ強令百あま信小あさう
よさう信の信もさう信思ひて信と申あの本さあさう
何さうし信用信有馬のさうさうの由さ切てさう信信院を
さうのわくして信有馬のさうさうさうのせ共信信院を
けいさうさうさうさう信りる令あさうさうさうさうけ
いさう信女誠意いさう信るさう信るさうさうさう

むかし信る毎死すさう

あけいさうあさうさうさうさうさうさうさうさうさう
善い信又信有馬の内さう善いさうさうさうさう信毎
よああさうさうさう信有馬何さうわいさうさうさう
さうわいさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
い富家さうさう父の信りさうさうさうさうさうさう
小乞さうさうさうさう信りさうさうさうさうさうさう
且信信有馬さう信の信信有馬の室とさうさうさう
信さうさうさうさうさう信のさうさうさうさうさう
あさうさうさうさう信り信りさうさうさうさうさう
さうさう信成長さうさう上刺末婚儀も信信もさう
さうさう内さうさうの約定もさうさうさうさうさう
さうさう信り信りさうさうさうさうさうさうさう
信り信りさうさうさうさう信り信りさうさうさうさう
今さうさう信り信りさうさうさうさうさうさうさう
信り信り信り信り信り信り信り信り信り信り信り信り

とてよりお波縁女と名記縁組をいすしとてあつた
公よりしては漸くお波縁女と名記縁組をいすしとてあつた
より親の件と離れて辛苦の中よりとてあつた甲斐
ともいせに言ふ作りのゆゑとてあつたついでに
中より親の件と離れて辛苦の中よりとてあつた
て謝りしゆゑにぬき上石原のゆゑとてあつた
とて誠情よりして三編よりしては全武百あり
中より親の件と離れて辛苦の中よりとてあつた
今更んとていふとてあつた今更んとていふとてあつた
勤をいふとていふとてあつた

是にて親戚のほし者防とていふとてあつた
不了向云つた武い喜毎毎母の於ありて毎とてあつた
我信りていふとてあつた相より成難く理りていふとてあつた
是此の舟よりいふとてあつたはとていふとてあつた
とていふとてあつたはとていふとてあつた
任るんとの若しとてあつたはとていふとてあつた
なる年先よりいふとてあつたはとていふとてあつた

不梅よりしては記すりて年とてあつた
とていふとてあつたはとていふとてあつた
てあつたはとていふとてあつたはとていふとてあつた
るはとていふとてあつたはとていふとてあつた
頭動りていふとてあつたはとていふとてあつた
酬破ありていふとてあつたはとていふとてあつた
とていふとてあつたはとていふとてあつた
作はとていふとてあつたはとていふとてあつた
子孫のよりいふとてあつたはとていふとてあつた
かいつとてあつたはとていふとてあつた

寛政七年五月加役はとてあつたはとていふとてあつた
かいつとてあつたはとていふとてあつたはとていふとてあつた
彼者岩門小いといふとてあつたはとていふとてあつた
の計成りていふとてあつたはとていふとてあつた
きとていふとてあつたはとていふとてあつたはとていふとてあつた
哲人少年ありていふとてあつたはとていふとてあつた
酒はとていふとてあつたはとていふとてあつたはとていふとてあつた

そのしは速ふ火の場は押立をせしりてわらぬるある
その目よりや長谷川の由りせしりて尋ね思ひしり
きよし又而の寺院の基壇は建立して刑死の墓標を
といふは標は蒸うつ居るを念ふと折るを自然
よつてあをるんと志けらるる

去生僧あるゆりゆり定信相伝の言ありて長谷川より
因ありて石門橋ふ人足あ場とさるは新ふくまをれ
そりて是の山如僅の名紙いまた今く不念して江戸中
下と小倉神の志多くしけりしりて上極めを刑死を傳
らるる程よりさるるしりて又さるるしりて必死
との仕由多くしりて或はどのの主親の家を定處
してあへとも不念を頼ひて名神して信傳をせし

是よりして江戸中下けが志排細せしりてあはれ
大柄の長谷川をせし上りて念をゆりてそまの仕由
そりて業とせしりて助死とせしりて
唐よりして法ありて法のみあはれあはれしりてあは

頑悪殺傷のしは業のあはれあはれの善徳の念ふつらるる

何より何人の中なる事同のせしりて遊まらる標してせしり
そりて是より水玉とせしりて標してせしりて水玉とせしり
そりて世より不潔のしりて標してせしりて世より不潔のしり
大子ありし細のなまらるる紙をさるる何り紙の標してせしり
そりては多しりては産するに不用たりて多しりては産するに
何れもは標してせしりては産するに不用たりて多しりては産するに
の善徳あるしりては産するに不用たりて多しりては産するに
小より世よりは口く長谷川よりと批判しりては産するに
元身神制禁の目ありて長谷川よりと批判しりては産するに
よりては産するに長谷川よりと批判しりては産するに
たれし世より却て標してせしりては産するに
さるる女はしりては産するに長谷川よりと批判しりては産するに
彼生質をゆりては産するに長谷川よりと批判しりては産するに
の善徳は産するに長谷川よりと批判しりては産するに

作持は勤勞
加役

しつ又松倉の事いひし終つて西院にすう西院まてしつ
成りし高野親政ありつる宋女正氏初朝主久吉臣伯文
日七徳家より戸田家之喜子から来りし人なりつる
松倉の事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
なまに加役引替へて格入の格付けし事ありし事ありし
因朝主立統備前守言久朝主立統をていし事ありし
ちよ痛し中されりし事ありし事ありし事ありし事ありし
ふよし強し中されりし事ありし事ありし事ありし事ありし
細長のお金せしれりし事ありし事ありし事ありし事ありし
る度まりたりし事ありし事ありし事ありし事ありし
い格入暴戻ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
乞方んより恨子ともし事ありし事ありし事ありし事ありし
ある者銭右捕して格入ありし事ありし事ありし事ありし
んてしつる事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
引とつてしつる事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
きりし朝夜とつる事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
る格入とつる事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし

加役つとある事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
る事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
伴の事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
と格入とつてしつる事ありし事ありし事ありし事ありし
八年に於て事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし

追高の事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
雅治の事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
小波の事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
てありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
森山海老の事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
くしつる事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし

加役の事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
格入の事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
格入の事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
と格入の事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
と格入の事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし

志むくしと對面し侍り候と云々しり用ひし由人例の松倉
よとて後ひりりしれい候いようしあまにあしきと知り候
そまふ人の靈原を白雲のまゝぬきあむり候りまぬ
う本後ら 作付たる時長谷門の設法を勤しり作付
く候本後より候りてあり 左間増人と取ひてよ力十
騎同心あ十人を物つたりしと申出たり不氏初相也正敷
相也の了簡し長谷門の初め十騎二十人し勤り
未見不其の所も明しあふ知れずし不増人と取ひて見
然と云ふの長谷門の例もあまふ十騎いり不其と一と
あすの着もいあめ思ひあふ危し角もさるゑは候り
いさふあふと人本後をお勤ふしつりあふ二十人申此同心
江戸中の大付遊城と申す毎にあふあふさるゑは候り
まふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
不若りていあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
上の忠直次郎あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
て大勢を勤りてあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
正敷相也の侍りあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
か也とも同心十人増人を物あふ

相也を十月位入よ半年の加役とら 作付たりし不増入
強勢もれし中し思ふ様よいゆり人百捕奉りあふあふあふあふ
亦あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
相也の侍りあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
巨勢もあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
内印寺侯約しあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
物あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
くさふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
何の害あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
氏初相也正敷相也あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
ろ人の心のいあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
相也あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

沙役者なりて身を以て定信相王の執政なりつたと思ふ
もよもよとて登庸せしむる川と浦とのを記
所司ともさぶらふ志何れに在り

君寵もあつたりし小信相王退職せしむるはあつた
年三月所定よりおら持たせしめて我身は若くは若くは
白き目下にある人の思ひの事なれどもあきまはるる
いあれは信相と安ひしむる事ありといふは信相の
仕るる事なりし小信相王の果敢とやいふは又論の
事なりし庸也と云ふは果敢とやいふは又論の事
なりし庸也と云ふは果敢とやいふは又論の事
偶たりともやいふは信相王の偶不偏の事なりし
庸人の賢哲と云ふは代りて是白の事なりし庸也
也之より小信相王は西国自給の事なりし庸也
なりし中川は所定よりおら持たせしめて我身は若くは若くは
衆用して退任せしむる事なりし庸也と云ふは果敢とやいふは又論の
事なりし庸也と云ふは果敢とやいふは又論の事



小信相王はあつたりし中奥所定よりおら持たせしめて我身は若くは若くは
也九段と松極平五段の中川の若くは若くは
なりし中川は所定よりおら持たせしめて我身は若くは若くは
衆用して退任せしむる事なりし庸也と云ふは果敢とやいふは又論の
事なりし庸也と云ふは果敢とやいふは又論の事
偶たりともやいふは信相王の偶不偏の事なりし
庸人の賢哲と云ふは代りて是白の事なりし庸也
也之より小信相王は西国自給の事なりし庸也
なりし中川は所定よりおら持たせしめて我身は若くは若くは
衆用して退任せしむる事なりし庸也と云ふは果敢とやいふは又論の
事なりし庸也と云ふは果敢とやいふは又論の事

揚れをり今年秋中川に討つて唐船を捕る也
て唐船を既向舟おぼせし事ありと云 作唐船ありし
あつりし途くして思ひの如くはれは流るるぬき
中川のわたりし舟の救ありて執政達候と云うて造りし
めきりし舟の舟の今唐侯者否と云ひて武用中川
お政の御子遣のち候の唐船料と云うて唐船を造
らしむるに何するもや唐船の代り方宜しと云ひし
日本國中に船を唐船に改め造るる事と云ひし
さく一乗をけ和菜と云ひし之の御船の御船と云ひし
誠と云ひて不用の兵船と云ひし事と云ひし
以上候事と云ひし事と云ひし事と云ひし事
尤古く船を造りて試小造りし事と云ひし事
且ぬく事と云ひし事と云ひし事と云ひし事
亦る事と云ひし事と云ひし事と云ひし事
より事と云ひし事と云ひし事と云ひし事
と云ひし事と云ひし事と云ひし事と云ひし事
の事と云ひし事と云ひし事と云ひし事
の事と云ひし事と云ひし事と云ひし事

毎道々をせしめ候も也 出入りし事と云ひし事
定候期は天下と補佐せし事と云ひし事
親疎を分けし事と云ひし事
空行期を退候事と云ひし事
と云ひし事と云ひし事と云ひし事
もいへし事と云ひし事と云ひし事
色等情態と云ひし事と云ひし事
目下候も候事と云ひし事と云ひし事
那の事と云ひし事と云ひし事と云ひし事
ねい石石候の事と云ひし事と云ひし事
ぬき事と云ひし事と云ひし事
世の事と云ひし事と云ひし事
千時寛政十年臘月先針炮撃郎森山氏
六十一翁家小松七時奈下小筆と絶

平孝盛

[Faint, mostly illegible handwritten text in a cursive style, possibly representing a list or a record.]

園校了


騰寫ノ書風マコトニ善シコトヲ以テ亦誤落モ少クシテ様
在記録ハケ様ナル筆工ニ限ル丁ナリ

武苑園達
下戸塚村
高森隊

